泉家で起きた小さな事件

クリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泉家で起きた小さな事件

【Ｎコード】
Ｎ４１０２Ｉ

【作者名】
クリア

【あらすじ】
小説家でありこなたの父親である泉そうじろうは、ある日、１６年前に死んだ妻のかなたが家に訪れて、再会するのであった・・・・

再会（前書き）

小説を書くのは初めてなので、文の構成&誤字脱字のオンパレードかもしれませんが、宜しくお願いします。

再会

俺の名前は泉そうじろう。職業は小説家で本もそこそこ売れてはいる。しかし、たまに近所の人たちから自由人（ブータロー）と思われてしまう。でも、そんな俺でも結婚ぐらいはしており、幼馴染で背が小さくてかわいい泉かなたと、背は母親に似て、性格は俺に似た娘の泉こなたの3人家族である。しかし、妻のかなたは娘のこなたを産んだ後死んでしまい、今は2人暮らしである。

そしてかなた死んで16年の時が過ぎた。こなたは立派に成長して、昔は小さかったが今は少し大きくなって（それでも小学生と間違われるが）もう高校生である。そんなある日のことだった。

「んじゃ、お父さんいってきまーす」

とこなたが玄関で言うと、

「こなたぁ、本当に行っちゃうのか？」

と悲しい声を出しながら俺はこなたのいる玄関に向かった。するとこなたは少し引いた様子で、

「…お父さん…、少し自重しようよ…。ただ友達の家に泊まりに行くだけなのにさ…」

と言った。

俺はこなたにかまってほしくて、

「だってこなたがいないとお父さん、寂しくて死んじゃう！！」

と言うと、こなたは

「ハイハイ、それだけ言ってるって事は大丈夫だよ。それにお父さん仕事しないといけないでしょ。」

と言い、そして「んじゃ、改めて行ってくるね～。」と言って家を出た。

こなたが家を出て俺は

「ふぅ…。さて俺も仕事をするか。」

と言い、2階へ上がった。しかし2分後、仕事に集中できないので

「よしっ、息抜きにゲームをしょう！1時間やったら、また仕事をしよう！」

と言ってゲームをするが、それが飽きたら今度は眠くなり

「今日は寝るかぁ…。」

と言って寝ようとしたその時、家のチャイムが鳴ったのである。

「誰だろうか…。」

と眠そうに玄関に向かい家のドアを開けてみると、そこには意外な人物が立っていたのだ。俺は自分の目がついにおかしくなったのではないかと思った。なぜなら……そこにいた人物は……もう死んだはずの泉かなたが立っていたのだから……。

蘇生

「かなた・・・・・？」
俺は分からなかった。玄関のチャイムが鳴ったからドアを開けたらそこにいた人は、この１６年間ずっと心の中で「会いたい！！」と思った人だからだ。いや、まてよ…。これはかなたとは違う人なのではないだろうか？なぜなら、かなたは死んだのだ。そう１６年目に・・・・・！！
そう考えていると、かなたらしき人が、
「ただいま、そう君。」
と言ったのだ。
「かなたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
俺は、かなたの名前を叫びながら、抱きついた。
「ちょっ…そう君。そんなでかい声を出したらご近所に迷惑でしょ。」
「何言ってるんだ！！俺は…俺は…！！」
と叫んでいると、
「…とりあえず我が家に入りましょ。」
と優しくかなたは言った。

「うーーむ・・・・・」
あの後、俺はかなたと一緒に家の中に入り、
「それじゃ、お茶を出してくるわね。」
とかなたは台所の方に行った。
俺は、ソファーに座ってかなたを待っている間になんとか冷静になり、そして考えていた。
「本当に幽霊っているんだなぁ・・・・。」と。
俺は、幽霊とかはあまり信じないほうだったので、冷静になって思

ったことがそれであった。
「しかしながら・・・・・なぜかなたがいきなり現れたんだ？俺・・・・・恨まれるような事したっけ？」
と考えているといきなり
「はい、お茶。」
とかなたが現れたので俺は
「うぉぉぉぉい！！」とビックリして叫んでしまった。
大声で叫んだので、かなたはびっくりして
「どうしたの、そう君？」と聞いてきた。
俺は、
「いやっ、かなた急に現れたからさ・・・・。それに少し考え事を・・・・。」
と正直に答えた。
するとかなたは、
「その考え事って、もしかして私が何故ここにいるかって事？」
「うっ！！なぜ分かったんだ！？」
「ふふっ、あいかわらず思ってることが顔に出てるわね。」
と微笑みながら言った。
俺は、
「その勘の鋭さは、変わらないな…。」と苦笑いしながら言った。

「それにしても、かなたはどうしてここに？もう死んだはずじゃ…」
と言うと、かなたは
「ええ・・・。たしかに私は死んだわ…。いまの私はただのゴースト。そう君にしか見えないわ…。」
と少しだけ悲しそうに言った。
俺は、その言葉を聞いて「ああ、やっぱりな…」と心の中で落ち込んだ。
落ち込んだ俺を励ますつもりだったのかもしれないが、かなたは、
「あっ、安心してよそう君。私もしかしたら生き返るかもしれない

しさ！！」
と言ったのだ。
俺は自分の耳を疑った。いまかなたは「もしかした生き返るかもしれない」と言ったのだ。
俺は、少しの間その言葉が頭の中で鳴り響いていたのであった・・・・・・。

蘇生（後書き）

少し、文章の書き方を変えてみました。見にくかったら教えてください。

契約の書

まだ頭の中では、わずかにあの言葉が響いていたが俺は、
「生き返るって・・・・・本当なのか！？」
と思わず大声で言ってしまった。
かなたは、俺がいきなり出した大声にビクッとしていたが、それ以外は冷静だった。そしてかなたは冷静に、
「そう君、私が蘇る事は本当なの。ある条件をそう君がしてくれたら私は蘇るわ。」
「・・・・ある・・・・・・条件・・・・・？ある条件とは一体何なんだ！？」
俺が、そのことに聞くとかなたは自分の服のポケットからある紙を出した。
「これは契約の書。これにそう君の名前を書けば私は蘇るわ。それが条件。」
「・・・・は？」
俺は意外な言葉だったので思わず言ってしまった。
「そんな簡単な事で蘇るの！？」
「えぇ、それだけ」
「本当に？なんか地獄で試験を受けろとかじゃなくて？」
「本当にそれだけ。」
本当に以外だった。なぜなら俺は、「きっと厳しいんだろうな。」と思っていたからだ。
神様も意外と優しいんだな。こんなチャンスをくれるとは！！
「それじゃ、その紙を渡してくれないか。名前を書くからさ。」
と言ったら、かなたは静かに、
「でも、この紙に名前を書けばあることが現実の世界でおこるわ・・・・。」
と言うのだ。

「ある事？ある事って一体なんだ？」
と俺が聞くとかなたは、とんでもない事を言ったのだ・・・・・。
「その紙に書けばこの世界の一人の人間が死ぬわ・・・・・。そしてその人の命を犠牲に私は蘇るわ・・・・・。」
俺は、その事を聞いてゾッとした。そして、
「その話・・・・本当なのか！？」
と聞くと、かなたは静かにコクリと頷いた。
俺は、その話を聞いて自分は今人生の分かれ道にいるのだと初めて知った。
俺の判断で犯罪者になるか、ならないかにいるのだ。
俺はしばらくしてかなたに質問した。
「その死ぬ人って・・・・・誰だ？」
かなたは、
「分からないわ・・・・・。誰が死ぬのか・・・・・・私にも分からない・・・・・。」
と言ってきた。
俺は完全に困り、
「なら、かなたが決めてくれ・・・・・・。俺には・・・・・・決められない！」
とかなたに選択させたのだ。
しかしかなたは、
「それはできないわ・・・・・。全てはそう君に決めてもらうようになっているの・・・・・。私はただそう君が決めたことに従うだけ・・・・。蘇るか、またあの世に行くかはそう君にかかっているの…。」
俺はかなたの話を聞いて、さらに困った。
正直に言うと、俺はかなたを蘇らそうと思っていた。「どうせ他人だし・・・・。第一俺が犯人だっていう証拠は残らない・・・・。」

というのが俺の本音だ。
そして、俺の夢だった「家族」が全員そろうのだ！家族３人で旅行に行ったり、家でごろごろしたりするのが夢だった。「当たり前の事」を家族３人ですることが俺の夢なのだ。
（すまないが・・・・・かなたに蘇るため・・・・・犠牲になってもらうぞ・・・・・。）
俺は、黙ってかなたからその紙をもらい、そして近くの机に向かい、名前を書く決心を決めたのであった・・・・・。

こなた

俺はいすに座り、机に契約の書を置いた。
そして、右手にペンを持ち、その紙に自分の名前を書いていった。
「泉」
世界中の人々よすまない・・・・・・
「そ」
あんたの命が消えれば、もう少しで・・・・・俺の夢が・・・・・
「う」
俺はかなたを愛してる・・・・愛してるんだ・・・・・
「じ」
だから・・・・・だからこれで・・・・・
「ろ」
これで・・・・・うちの家族は幸せなんだ!!!!!
「「おとーさん」」

「！？」

その瞬間、俺の指が止まった・・・・・

（今・・・・・・こなたの声が・・・・・・・）

俺はあたりを見渡した。しかしここにいるのはかなたと俺だけだった。

その時、鏡を見て自分の顔を見た。

（これが・・・・・・今の・・・・・・俺の・・・・・顔？）

酷かった。元から酷いとは自分では思っていたが、それよりもっと酷かった。

なぜなら、俺は笑っていたのだ。

たとえ俺の自己満足で、他人が死ぬというのに俺は笑っていたのだ・・・・。

俺はゾッとして鏡を見るのをやめた。

そして俺は

（なぜこなたの幻聴を聞いたのだろうか？）

と不思議に思っていたのだ。

しかし、俺はこなたの名前を考えた瞬間、ひとつ疑問に思った・・・・・

それは・・・・・・・・・・

「こなたは、この真実を知って笑顔になるのだろうか・・・・・？」

俺は、また考えた。

もしこなたが、かなたが家に帰ってきたらそれはものすごい幸せそうな笑顔になるだろう。

しかし、この真実を知ってしまえば、こなたはもう二度と笑顔にはならないような気がした。

なぜなら父親である俺は、証拠はないが殺人者になるわけだ・・・・・・・

そして、母親であるかなたは、その殺した人の命を使って蘇るのだ。

それは、その人の「幸せ」「家族」、そして「未来」を奪った事になる。

その事を知ったこなたが、俺の夢の通りに俺たちに最高の笑顔を見せてくれるのだろうか・・・・・・

いや、こなたはそんな笑顔を見せてはくれないだろう・・・・・。

それどころか、「私は殺人者の父親と人の未来を横取りにして蘇った母親の娘なんだ・・・・・」とずっと思い続けるだろう・・・・・・。

俺は、その机にあった契約の書を持って、かなたの前に立った。

そして

「すまん・・・・・・・・・・・かなた・・・・・・・・」

と言ってその紙をかなたに返した…。

「俺、気づいたんだよ・・・・・・こんな契約で蘇ったお前を喜ぶのは俺だけで、こなたは喜ばないだろう・・・・・・。だから・・・・・・俺は・・・・・・書けない・・・・・・いや！書かない・・」

忘れていたのだ・・・・・娘の存在を・・・・・・。俺とお前の世界でたった一人の女の子。

その女の子が幸せそうに笑うと、俺たちも幸せになる・・・・・・。

そんな、大切な娘の考えを俺は忘れていたなんて！！

「俺、父親失格だな・・・・・・。俺は、危うくこなたの笑顔を奪うところだった・・・・。だから、かなた！！・・・・・・・すまないが・・・・・諦めてくれ・・・・・」

俺は辛かった・・・・・・。せっかくあの世から帰ってきた大好きな人を、またあの世に送り返すのだ・・・・・。それがどんなに寂しくて、悲しくて、苦しい事だろうか！！

…そう言い終わって、俺はかなたの方に向いた。

やはり、かなたは悲しそうな顔をしていた・・・・・・。

しかしかなたは

「・・・・・・同じだね・・・・・・」

「えっ・・・・・？何が同じなの？」

俺がそう聞くとかなたは

「私がもしそう君の立場だったら・・・・・・私も同じ答えだったわ・・・・・。」

俺は、それを聞くと心から救われたような気がした。
そして
「だよな・・・・・俺たち、こなたの「親」だもんな・・・・・・・。俺たちがどんなに会いたくても、こなたが悲しむなら・・・・・俺たちは耐えるもんな・・・・。」

「えぇ、それがどんなに苦しいことでも、こなたが笑ってくれたら、私たちはなにもいらないわ・・・・・」

そう言い終わったら、俺はかなたを、かなたは俺を見た。
そして、俺たちは笑った。その笑顔は、これから別れるとは思えないくらい幸せな笑顔だった…。

こなた（後書き）

長々と続けてすいません・・・・・
次でこの物語は終わります。

お別れ

しばらく笑っていたら、かなたがあの紙を俺に渡してきた。
俺はそれを見ると戸惑ったが、よく見るとその紙は少し変化していた。
それは、「契約の書」から「願いの書」と題名が変わっていたのだ。
そして名前を書く空欄が無くなり、替わりにそこには「願い」が書ける様になっていた。
俺はかなたに「これは・・・・？」と聞くとかなたは

「それは願いの書。そこの空欄に書くと願いが叶う事ができるの。
ただ、私みたいに死者を蘇らす事はできないわ。」

とその紙の説明を教えてくれた。

「俺が決めてもいいのか？」

と聞くとかなたは

「えぇ、そう君が決めていいのよ。」

と優しく言った。

「それじゃ・・・・・。」

と俺はスラスラと書いて、そしてかなたに渡した。
するとかなたは「えっ・・・・・・・」と驚いて、俺のほうを見た。
俺はその紙に

「こなたとかなたが出会えて、触れて、話せますように。」

と書いたのだ。

「俺は、かなたと再会して、話したり、触れたりすることができたんだ。でもこなたはまだ小さかったからその事を覚えていない。ならそう書くのが当たり前だろ。」

と笑いながら言った。

かなたは、

「でも・・・・・・いいの？」

と戸惑っていたが、

「いいって。その願いでかなたとこなた、二人が幸せになるんだから。俺にとってこれ以上の幸せはないんだから。」

と俺が言うと、かなたは少し顔を下にして、小さく

「ありがとう、そう君。」

と言ったのだ。それを見た俺はかなたを抱きしめたのであった・・・・・。

「あるかな～・・・・・・」

俺はアルバムで写真を探していた。

かなたは玄関で待っている。なぜなら、そろそろ旅に行くのだ。長

い長い旅に。
そして

「お～、あったあった。やっぱりね～。」

とかなたにある写真を渡した。
かなたはその写真を見て、

「そう君・・・・・・これは・・・・・？」

とまた驚いていた。
その写真には、俺と１６歳になったこなた、そして「かなた」の姿があったのだ。

「お前のことだから、毎年遊びに来てんのかなって思ってさ。やっぱり来てたな。」

俺は、今かなたの「幽霊」が見える。だからかなたが見えたのだ。

「それ・・・・・俺たちが来るまでの宝物にしておけよ。」

と言うとかなたは「うん！」と言って、とてもうれしそうに笑った。
「それじゃ・・・・・・・行くね。」
「あぁ、・・・・・・・向こうに行っても元気でな・・・・」

俺とかなたはお互いに寂しい顔で言った。
しかし、俺たちは泣くほどではなかった。

「向こうでもずっとあなた達を思っているから・・・・」
「その写真・・・・・亡くすなよ・・・・・。」

お互いにこう言った後、少しだけ微笑んだ。
そして
「それじゃ、・・・・・・またねそう君。」

「おう!、またな。」

そう言ってかなたが玄関の扉を開けたらその先がものすごい光っていて、俺は目をつぶった。
そして目を開けたときにかなたはもういなかった・・・・・・。

しばらく玄関で何も考えずに立っていたらふと「・・・・・夢だったのかな。」と思った。
そして俺は、居間に戻ってみると、そこには二つのカップがあった。
ひとつは空のカップ、もうひとつは少し飲んだ後があるカップだった。
俺は、それを見て、微笑んだ。
そして、俺は仕事をするために二階に向かったのであった。

この「願いの書」が叶い、こなたとかなたが出会うのはもう少しした後のお話である。

お別れ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました。

すいませんが、この話を読んだ後、必ず次の「あとがき」を読んでください。

重大なことを話しますので・・・・・・

あとがき

この度は、「泉家で起きた小さな事件」をお読みなってありがとうございます。
突然でありますが、作者のクリアはこの小説をここで終了することを決めました。
理由は「この先の展開ができなくなってしまった」ことです。
本当は、この後作者のオリジナルキャラクターを出して、らきすたのキャラクター達と色々とやろうと思っていたのですが、「この話は繋げるより、終わらしたほうがいい。」判断したため、ここで終わらせました。

「ふざけるんじゃない！！」とか「続きが気になっていたのに！！」と思っている方、また読んでくださった読者の皆様、本当に申し訳ありません！！

しかしこのクリア、この次の作品をこの作品と合わす様に書くので、続きが気になる方はその作品を暇な時に読んで下されば大変うれしいです。ただ、話の都合上少し遅れるかもしれません。そこはご勘弁を・・・・・。

私も次の作品で、もうこのような事はできるだけ避けるように最大の努力をします。
この度は、本当にすいませんでした！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4102i/

泉家で起きた小さな事件

2010年10月9日17時29分発行